

# 最新事情

地域交流とマナーの授業で体感する  
コミュニケーションの大切さ

## 愛知県立松平高等学校

(愛知県豊田市)

愛知県立松平高等学校は、普通科4クラス、生活情報科1クラスを有する高校である。さまざまな授業で地域の方の協力を得ているという生活情報科では、基本的なマナーや常識について、早い段階から学び、実践している。生徒たちはマナーの授業で何を感じ、どのような気付きを得ているのだろうか。取材した。



松平高等学校

### 教育こそが 地域の発展につながる

愛知県中部に位置する豊田市は、トヨタ自動車をはじめ自動車関連の製造会社が集まる工業都市だ。クルマのまちとも呼ばれており、主に自動車産業により発展してきた。

松平高等学校は昭和24年に、当時の松平村に開校した。戦後、自動車産業が急成長を遂げていた時代に、「教育で地域を興したい」という住民の熱い思いによって設立された。

渡辺昭校長は、同校が担っている役割についてこう説明する。

「先に触れたように、松平高校は自動車産業の成長のさなかに設立されました。松平村を活性化、発展させるとい意味では、この地に生産工場を誘致することもできたはずですが、しか



渡辺昭校長

し、当時の松平村の方々は、将来を担う子どもたちの教育こそが、地域の発展につながると思えたのです。地域の皆さんのこうした思いは現在に至るまで変わっておらず、本校の行事にも快く力を貸してください。子どもたちを見守ってください。われわれ教員は、地域の宝である子どもたちを預かっているという意識を強く持ち、子どもたちを教育し、地域に送り出すことを常に頭に置いています」。

定時制課程の農業・家庭科からスタートした同校は、昭和44年に全日制課程の普通科と家政科に改編された。平成8年からは普通科4クラス、生活情報科1クラスの編成になり、現在に至る。

生活情報科の生徒は、高校卒業後、豊田市内にある生産・技能関係の企業に就職する人が多く、今年度の就職内定率は100%となった。地域からの信頼も厚く、それに応える人材もすっかり育っている。

同科は、もともと設置されていた家政科に、



魅力発見フェスタで行われた  
ファッションショーの様子



家庭クラブの活動による  
竹炭の窯出しの様子。地域の方に指導してもらおう

「情報」分野を取り入れてできた学科である。その名前の通り、教育の柱は二つある。一つは、衣食住の生活産業に関する専門科目。もう一つは、情報社会をより豊かに生きるための基本的な知識やITスキルに関する専門科目。この両方を1年生で学び、2年生で「生活コース」と「ビジネスコース」に分かれる。1クラスのため3年間クラス替えはないが、さまざまな分野に興味関心がある生徒が一緒に過ごすことによって、互いに刺激し合える雰囲気になっているという。男女問わず、入学希望者が多い人気の学科でもある。

その理由の一つには、学習の場や学びの成果を披露する場が地域のさまざまなところに用意されていることが挙げられる。例えば、課題研究「情報デザイン講座」では、松平交流館の方々に指導してもらいながら柿

渋による染色を行った。「被服講座」では、自分たちが作った衣装を披露するファッションショーを、地域の方々を招いて大々的に開催したという。このファッションショーは人気のイベントになっている。

また、家庭クラブ活動では、学校近くの里山で採れた竹で竹炭を作り、加工品などを販売。協力してくれるのは、やはり地域の方々だ。教員以外の社会人と直接、話をしたり作業をしたりすることで、社会に目を向けるきっかけになっている。

松本緑生先生は「生活情報科の生徒は全員インターンシップを行います。受け入れてくださるのも地元企業の皆さま。こうした体験は生徒たちにとって貴重な体験になっています」と語る。一方で「基本的なマナーや常識について知っておかなければならない」と気を引き締め

## 立ち居振る舞いを見つめ直す マナーの授業

1年生のビジネス入門では、簿記や電卓、マーケティングの基礎の他、ビジネスの場での基本的なマナーや常識について気付きを得られるような内容も扱っている。一年間でビジネスに関連する基本的な内容を網羅するため、マ



ビジネス入門のマナーの授業

ナーだけに時間を割くわけにはいかないが、生徒たちが自分の行動や振る舞いを客観的に見つめ直すよい機会になっているようだ。

松本先生が担当するマナーの授業を、一部紹介したい。

授業では「好感が持てる態度振る舞い」や「名刺交換」などについて指導が行われた。中でも生徒の興味を引いたのは、レトルトカレーの外包装を使用した販売演習である。ご当地限定や辛さを売りにしたもの、海外のものなど、全員が異なる商品を手にし、互いにその商品を薦め合うのだ。一人がスタッフ、もう一人がお客さま役となりロールプレイングを行った。最終的に、スタッフ役がお客さまにカレーを買わせることができれば成功となる。

松本先生から基本的な言葉遣いの説明が行われ、ロールプレイングを開始。セールストークを始める前に、熱心に商品の特徴を調べる生徒、産地でお薦めする生徒など、やり方はさまざま



最新事情 38 ..... 愛知県立松平高等学校



(左から) 木村翔太さん、松本禄生先生、岡本亜実さん



宇野しずみ先生

だった。終了後はスタッフ役の話し方や態度から、「買いたくなかったかどうか」を判断。「買いたくならなかった」という声が多かったが、これをきっかけとして、接客時の言葉遣いやコミュニケーションにまで発展させていくのである。

「接客の現場では、お客さまから味や材料、ときには予想もしないことも聞かれます。このときに大切なのは、機転を利かせていかに会話を発展させられるか。こうしたコミュニケーションができるだけで、その店に対する印象はぐっとよくなるので

す」。

この授業は何をヒントにしたのだろう。

松本先生は教員になる前は、民間企業に勤めていたといい、「授業で行ったような販売も経験してきました。現場では接客だけでなく、トラブルなども起こり得ます。そんなときに実感したのはコミュニケーション力の大切さでした。生徒の将

来を考えると、そうした気付きの場があった方がよいと考えたのです」。

### 学びの振り返りのために 秘書検定を活用

習熟度を客観的に図るため、同科ではさまざまな検定試験を活用している。秘書検定もその一つである。秘書検定3級は2年生全員が受けることになっているが「合格そのものが目的ではなく、秘書検定でマナーに関する基本の振り返りを行うことが目的です」と語るのは、生活情報科の宇野しずみ主任である。

「当科の6割の生徒は就職希望者です。簿記やマーケティングなど、実務に直接役立つ資格も積極的に受験させています。その中で秘書検定は、1年生で学んだマナーの振り返りと、社会での常識、コミュニケーションについて体系的に教える教材として活用しています」。

生徒の反応はどうか。生活情報科生活コース2年の木村翔太さんは「秘書検定は専門知識というより社会の一般常識について問われているので、普段のことを振り返りながら解くことができました」と秘書検定を受験した感想を語る。特に難しかったと話すのはビジネス文書について。「ビジネス文書自体初めて目にしました。また決まり事が多く、一回練習しただけでは覚えられなかったので、繰り返し練習した」と話す。

1年生の岡本亜実さんは、事務職や秘書職の仕事内容に興味があり、自主的に秘書検定を受

験した。木村さんと同様に、常識的なことが問われているという印象を持ったそうだ。強く印象に残っていると語るのは、「自分だけで判断せず上司に確認する」という秘書の心構えに関することだった。

「この一文を読んだときに、ビジネスの場では基本的なマナーだけでなく、このようなルールも身に付ける必要があるのだと思いました。以前よりも秘書職に興味が増えました」と岡本さん。2級試験にも挑戦したいと意欲的だ。

生徒の話を傍らで聞いていた松本先生は「秘書検定での学びでは『社会人として何ができていないといけないか』という気付きを与えてくれると思っています。知識の習得や暗記だけでなく好きな人間関係が築けるかというところでありません。地域の方の協力も得ながらコミュニケーション力を磨いてほしい」と強く願う。宇野先生も、「検定やさまざまな活動が、社会で生き抜いていくための土台になる」とうなずく。最後に渡辺校長は、期待を込めてこう語ってくれた。

「検定試験による効果は先生方が話された通りですが、取得できれば生徒の自信につながります。その自信は学びを深めたり、広げたりするための原動力にもつながるはずですよ。生徒一人一人が学び成長してくれば、学校全体の学びに対する意識も底上げされていくことでしょ。ぜひ、生徒には自分の力を伸ばす方法を見つけてほしいですね」。